

歴史の中の女たち <第5回>

聖母グアダルペ

伊藤 滋子

女性といえるかどうか・・・少なくとも生身の女性ではない。しかし歴史の中で重要な役割を演じてきたことは確かだ。グアダルペの聖母のことである。人が神の慈悲にすがろうとする時、聖母は仲介役としてカトリック信仰のなかで重要な役目を果たしてきた。そして聖母はさまざまな形をとって人の前に姿を現した。その奇跡のひとつが、先住民と同じ褐色の肌をしたグアダルペの聖母マリアである。それはメキシコの征服が終わって10年が経ち、強制的な改宗によってようやくカトリックが先住民の間に根付き始めていた1531年12月9日のことであった。

メキシコ市の郊外に洗礼名をフアン・ディエゴという、先住民の中でも最も低い階級に属する男がいた。その朝かれはミサに出席しようと、まだ暗い中を教会に向かって歩いていった。丁度テペヤックの丘に差しかけたとき夜が明け、得もいわれぬ美しい鳥のさえずりがして、耳を澄ますとかれの名を呼ぶ声が聞こえるではないか。訝りながら丘に登ってみると、そこに美しくも神々しいお姿の一人の女人が立っておられ、かれは思わずその方の前に跪いた。

「フアニート、私の一番小さな息子よ。どこへ行くのか。」「神さまのお導きを受け

るために、トラテロルコの教会に向かうところです。」「私は聖母マリアです。司教のところに行って、私がこの場所に教会を建てることを望んでいると伝えなさい。あなた方に愛、慈悲、救済、守護を与え、私を信じ求める人だれもが、悲しみや痛みを私と分かち合えるようにするためです。」

ディエゴは町に入るとまっすぐに司教の館へ向かった。司教スマラガは徳の高いフランシスコ会士であったが、当然のことながら、かれの話をにわかには信じようとしなかった。ディエゴがしおしおと丘に戻ると、聖母は同じ場所でかれを待っておられた。「お言いつけどおりにしましたが、信じてもらえませんでした。私のように卑しいものがあなたの使者を勤めることはできません。」「使者になれる者はたくさんいますが、あなたが勤めることに意味があるので。明日また司教のところへ行き、あなたを遣わしたのは聖母マリアであると言いなさい。」「喜んで参りますが、きっと同じことでしょう。とにかく司教様にお会いして、午後ご報告に伺います」と言い、家へ帰った。

翌日曜日の朝、ミサのあと司教館に行き、泣きながら前日と同じことを訴えた。司祭は、どんなお姿だったか、その場所は、とさまざまな質問をし、ディエゴの答えから

どうみてもそれは聖マリアと思えたが、なおこのみずぼらしい男の言葉を信じることができず、「お前の訴えだけで教会を建てるわけにはいかない。何か証拠となるものを持って来なさい」と言った。ディエゴはその足で聖母のもとに行きこのことを申し上げると、聖母は、「よろしい。明日またここへ来なさい。証拠になるものを用意してあげましょう。今度はきっと信じてもらえます。あなたにもご褒美をあげましょう」と告げ、ディエゴはその言葉に安心して家へ帰った。だが翌日の月曜日、かれは丘には行けなかった。一緒に住んでいる伯父が疫病で倒れ、その看病で家を出ることが出来なかったからだ。夜になると伯父は、「死期が近いから、教会へ行って臨終の儀式を司る人を呼んできて欲しい」と頼んだ。

12日火曜日の朝、ディエゴは教会に急いだ。丘の下まで来たとき、聖母との約束をどうしようかと一瞬迷ったが、瀕死の伯父のために一刻も早く人を呼びに行かなければと自分に言い聞かせ、そこを通りすぎた。それをご覧になった聖母は丘から降りてきてかれの前に現れ、「どうしたのか」と聞かれた。かれは事情を話し、用事が済んだらすぐに戻って参ります、といった。すると聖母は「伯父の病気のことは心配しなくともよい。かれは治ります。それより丘に登ってごらんなさい。花がたくさん咲いていますから、それを摘んで司教のところへ持って行きなさい」と命じた。安心したディエゴが丘に登ってみると、そこにはこの土地のものではない、多種多様の美しいバラが咲き乱れていた。丘は岩だらけの荒地で、



しかも氷が張るほど寒い季節というのに、芳しい香りを放つ花々は、真珠のような露をたたえている。ディエゴがマントの裾を広げ、摘んだ花を包んで丘から降りてくると聖母は、「この花が私の言葉の証しです。司教の前でそのマントを広げ、自分に起こったことをすべて話しなさい。花は他の誰にも見せてはなりません」と仰せられた。

ディエゴは芳しい花の香りに包まれて、自信に満ちた足取りで司教館に向かった。待たされている間、司教の従者たちは好奇心から彼が抱えているものを見ようと手をのばすのだが、触ったとたん花は宙に消えてしまうのだ。その事を聞かされた司教スマラガはすぐさま今までのことは信仰を試すための試練だったことを悟り、ディエゴを呼んだ。かれが司教にバラを見せようとマントを広げたとたん、花は床に飛び散り、

白いマントには聖母マリアの像が浮かび上がった。この奇跡を目にした司教はその場に跪き、かれの言葉を信じようとしなかったことを後悔し、聖母に許しを乞った。

ようやく聖母との約束を果たすことができたディエゴが心も晴れ晴れと家に帰ると、驚いたことに伯父は聖母の予言どおり、すっかり快復していた。しかも聖母は伯父の前に顕れて、ディエゴを司教のもとに遣わしたことを教え、自分の名はグアダルペの聖母マリアであると告げられたという。この話はすぐに町中に知れ渡り、人々がそのマントを一目見ようと押しかけたので、司教はそれを大寺院の祭壇に移した。マントに描かれた絵はほぼ5世紀を経た今なお大した傷みもなく、テペヤックの丘に建つグアダルペ寺院に飾られており、誰もが拝観できる。ディエゴは2002年、正式にカトリックの聖人に列せられた。

このグアダルペにまつわる話は単なる言い伝えではなく、奇跡から25年後に書かれた文書が存在する。ニューヨーク公立図書館所蔵の『ニカン・モポウワ（＝かく語られた）』ということばで始まる、マゲイの繊維で出来た紙にナワトゥル語（以下ナワ語と表記）で書かれた3つの文書で、原作に近い写本と見られている。作者のアントニオ・バレリアノは先住民の首長の家系の出で、先住民子弟にキリスト教のエリート教育を施すためにトラテロルコに建てられた学校の生徒であった。ナワ語を母国語としながら、スペイン語、ラテン語も出来るという、当時第一級の教養人である。文書はディエゴの死後8年経った1556年頃書かれ、

バレリアノはディエゴと接した人物から話を聞き取って書いたものと思われる。現代におけるナワ語研究の第一人者であるレオン・ポルティリャ博士は、「この文書の構成は大変精巧で、貴族が用いた格調の高いナワ語で書かれており、作者のこの言語に対する造詣は非常に深い。聖母が普通の人の前に現れたという話はスペイン各地に多くあり、バレリアノは学校でその場面を描いた絵を数々目にしていたはずだ。1556年といえ、グアダルペ信仰はすでに相当な広がりを見せていた。当時演劇は重要な布教手段であり、教会の内外で盛んに様々な宗教劇が上演されていたから、バレリアノはそれに触発されてメキシコ文学の珠玉といえるこの美しい物語を書いた、という想像も十分成り立つ」と語る。

聖母が顕れたテペヤックには、その昔トナンツィン（ナワ語でわれわれの母の意、豊穡の女神）を祀る神殿があった。しかもその主祭日は12月の初めで、ディエゴの奇跡が始まる12月9日とほぼ重なる。人々は昔からその時期になるとそこに参拝に来ていたのだから、たとえ今度は別の神の母を拝むためであったとしても、それほど抵抗を感じなかったはずだ。また古来丘は生命を再生させる雨の神が住む場所であったし、その上でディエゴが見た花畑は『花咲く土地』として先住民の宇宙観のなかにも存在した。明らかにキリスト教のマリア像の形をとりながら、褐色の肌をしたトナンツィン・グアダルペは二つの文化の融合、二つの異なった宇宙観の統合であり、まさに始まろうとしていた混血のメキシコを予見さ

せるものであった。かくして聖母が顕れる舞台は必然的にテペヤックの丘でなくてはならなかったのだ。

『ニカン・モポウワ』は長い間埋もれたまま忘れ去られていたが、ようやく一世紀後、これをもとにして書かれた二冊の本が出版され、初めて世に知られるようになった。一冊はスペイン語、もう一冊はナワ語で、それぞれ別の作者による。しかしながら全植民地時代を通じて、グアダルペは特に社会の上層部ではさほど重要視されなかった。土俗信仰とキリスト教が渾然一体となった似たような話がメキシコ各地に起こり、カトリック教会はそれを迷信として根絶しようと躍起になっていたという事情もある。しかし日頃から虐げられ、貧困や飢饉、疫病、洪水などのあらゆる不幸に晒されながら社会の底辺にいた一般民衆は、かれらがあるがままの姿で受け容れ、すべてを許し、癒してくれる聖母を必要とした。自分たちと同じ褐色の肌をしたグアダルペのメッセージはディエゴに象徴される貧しい者、何ももの持たない者に向けられていたからだ。それ故にグアダルペ信仰はまず先住民、メスティソ（混血）から熱狂的に支持され、社会の発展とともに全国民からメキシコの象徴と認識されるに至った。そして遂にはクリオリョ（現地生まれのスペイン人）にまでもメキシコへの帰属意識を植えつけて、かれらを精神的にスペインから切り離してしまった。実はかれらも本国生まれに劣る準スペイン人として、さまざまな形で差別を受けていたのだった。

このことがスペインからの独立という動

きにつながっていったことは当然の成行きといえる。1810年イダルゴが上げた最初の独立の叫びは「聖母グアダルペ万歳」で始まり、かれが掲げたのはグアダルペ像の旗印であった。グアダルペ信仰は同じくスペインからの独立を目指す他の中南米の人々にも影響を与えずにはおかなかった。南米の独立の父シモン・ボリーバルは、「政治的情熱と宗教的情熱が渾然一体となって自由を求めるという神聖な欲求への熱い思いが醸成されていった。メキシコにおけるグアダルペ信仰はいかなる預言者もなし得なかった崇高な導きであった」と、讃える。その後カトリック教会はグアダルペをメキシコだけでなく、全アメリカ大陸の守護聖人とし、多くの中南米諸国のカテドラルにはグアダルペに捧げる祭壇が設けられている。

総本山であるメキシコのグアダルペ寺院には年間一千万人の人々が訪れるという。主祭日は奇跡のクライマックスである12月12日だが、一ヶ月も前から花を持ち、各地の民族衣装に身を包んだ巡礼の行列がひきもきらず、中には100キロも歩いてくるグループもある。2キロほどの巡礼路を膝から血を出しながら跪いて歩く人も多い。ひとりで来る人は少なく、大てい家族や教会仲間、職場仲間、近所の人々、同郷人、同業者組合などで連れ立って訪れ、中には数百人に達するグループもある。カトリック信者でなくともグアダルペ寺院に参拝することには何の抵抗も感じないという人も多く、日頃仏教とは縁がなくともお寺に行くと自然に手を合わせる日本人の感覚と似ているかも知れない。（いとう・しげこ）